

佐渡産 「八幡いも」の復活物語

新潟県佐渡島 本間東三夫

昨年（2006年）から旧佐和田町八幡地区で始まった「八幡いも」再生プロジェクト。かつて地域で盛んに作られていた八幡いもを見直そうと、地元の人たちが立ち上がった。栽培方法を工夫し、試行錯誤のすえに産地化への手がかりを得る。生産者も増えつつあり、荒廃農地の再利用にもつながる可能性がある八幡いもは、いま、地域の顔になろうとしている。

■自ら作った「八幡いも」で芋煮会をやる

——むかし、昔、いまから四〇〇年も前のこと。佐渡の相川奉行所に、初代奉行が甲斐国（山梨）からやって来た。たそぐな。そのお奉行は、砂丘地帯で飛砂や飛潮の害から畑を守ろうと、地元の百姓たちとともに、砂垣を造り、松苗を植えた。たそぐな。災害から逃れられた百姓たちは、畑でサトイモをつくり、奉行所に納めることとなった。

以来、「八幡いも」がサトイモの代名詞となり、各地で八幡いもづくりがブームになっていったとさ——

佐渡島は日本海に位置し、新潟より高速船で一時間、カーフェリーで二時間半の日本最大の島です。歴史は古く、とくに江戸幕府を支えた相川金山、民謡「佐渡おけさ」は有名なもので、このくらいはご存知の方も多いいと思います。面積は約八五五平方キロ、人口七万人弱の島です。

我々の住む旧佐和田町八幡地区はどんなところかという、佐渡の国仲平野の北西部に位置し、海岸線は「雪

の高浜」と呼ばれる砂浜と「越の松原」と呼ばれる松並が調和し、国府川と石田川に挟まれた平坦地で農業が主な産業です。島内における八幡は、「八幡人形」（土人形）、「八幡箆笥」、「八幡いも」、「八幡かぼちゃ」と冠の付いた名物がありました。しかし、現在は職人が減り、農業従事者は高齢化し水稲が主となり、畑作は年々減り続け、雑草地に変わっています。過疎化が進むと同時に、昔からの自然、伝統、人情などが希薄になりつつあります。

そんなとき、青年会から「このままでは、八幡がダメになる。将来の子どもたちのために何かやらなければ」という意見が出てきました。つい二〇年くらい前までは、ガキ大将がいて、朝から日が暮れるまで外で遊んだ楽しい思い出が甦ります。しかし、今は木登りをした松ノ木は松くい虫の影響で枯れ果て、遠浅の浜辺で野球をやった砂浜は、侵蝕が進み護岸堤に変わり、かつての遊び場が危険区域になってしまっている現状です。

そこで平成一三年五月一日、「八幡・銀杏（いちよう）の会」をたつた六人で立ち上げました。設立目的は「未来の子どもたちのために、今できることをやろう」。なぜ銀杏かというと、旧八幡小学校に大きな雌の銀杏の木があったからです。もう一度、あの当時の自然と人味を取り戻すことができれば最高です。そんな思いからスタートし、まずは植樹を行いました。延べ植樹数は一九年三月末までに銀杏の木約八〇〇本、松の木一七〇〇本。

また一四年度からは、緑化活動としてチューリッププランターの設置、環境美化活動として定期的に海岸清掃を実施。秋には地域活動として、特産物の「八幡いも」を使った芋煮会を行ってきました。当時は地域の人の好意により、八幡いもを無償で提供していただいておりますが、「自分たちで育てた八幡いもで芋煮会を開催したら、もっと地域に密着した活動になるのでは」と考えるようになったのです。

「銀杏の会」を設立してからすでに五年が過ぎ、会員数も五〇人（準会員含む）以上となって、地域の人にも少しずつ認められてきたころのことです。各行事にも二〇人以上のボランティアが集まるようになっていました。そこで、「銀杏の会」の総会で八幡いもの栽培について検討した結果、全員賛成で栽培することとなりました。

■ 佐渡産「八幡いも」の栽培拡大に 大きな手ごたえ

栽培にあたり八幡いもについて調べてみると、地元で栽培をしているのは四人だけで、当然市場には出回らないことが分かりました。まず種芋の入手をどうするかを考えました。インターネット、各機関に問い合わせた結果、農家の方、山梨県JA中巨摩東部、新潟県佐渡農業改良普及センターの好意により、「八幡いも」と呼ばれる種芋を入手することができました。これにより、佐渡産八

「八幡いも」、山梨産「八幡いも」、通常の「サトイモ」と三種類の種芋を入手したため、これらがどのように違いがあるのか、栽培方法は違うすればよいのかを調べました。また、八幡小学校に協力を依頼した結果、快諾していただき、児童も一緒に八幡いもの栽培を行うこととなりました。

いよいよスタートです。まずは、種芋の芽だしです。栽培している農家の指導を受けながら、日当たりのよい地中一〇センチぐらいのところに種芋を並べ、土をかけ、マルチビニールを施しました。二〜三週間もすると芽が出てきました。次に植え付けですが、植え付けの方法は各農家により違いがあることが分かりました。基肥のやり方にも圃場ほらばに三〇センチの溝を掘って施す方法と、散布して耕す方法との二つがあります。また、畝うね上げの有無、マルチビニール（透明）の有無と、この三点については農家によ



8月中旬の八幡いもの圃場の様子。



やっとの収穫、仲間たちと畑で記念撮影。

って意見が分かれましたが、今回は圃場に約三〇センチの溝を掘り基肥を入れ、畝上げして透明なマルチビニールを掛ける方式を主とし、その他の方式も試しに行うことにしました。

じつはこの作業を終えた六月に、山梨の「八幡いも」の栽培を見学に行きました。そこでは休耕田を利用していたので基肥を散布して耕し、種芋を植え（畝上げ無し）、黒のマルチビニールを施し、芽が出てきたらマルチビニールに穴を開けて育てていくという、私たちが想像もしなかった方法でした。この山梨方式については次年度において、試みるに値するものと研修に参加した会員は感じた次第です。また、親芋は焼酎に使用していると聞き、一同驚くとともに八幡いもが新しい何かを生み出すのではと手応えも感じました。

さて、五月に植え付けた種芋は順調に生育し、六月の

草取り、七、八月の水かけを経て九月後半に収穫となりました。収穫結果は、同じ八幡いもでも佐渡産と山梨産は全く異なる品種であることが分かりました。佐渡産は少し細長いエビイモに似た独特の形をしています。山梨産は丸みがかつた球状でした。味を比較すると、佐渡産はねっとりとした食感で、冷めてもおいしく食べられるのに対し、山梨産はほくほくとやわらかく、熱いときは甘みがありますが、冷めると味が淡泊なぶん、甘さが足りないように感じました。

また、約二〇ヶ所に分けて作付けをしてみましたが、乾燥地では成育が遅く適さないことが判明しました。夏場の乾燥時期には水をかける必要があります。一方、収穫で掘り起こすには乾燥地の方が楽であることも分かりました。これらの結果を鑑み、今回作付けした八幡地区内では、ある程度の管理（肥料、水やり、草取りなど）をすることにより、八幡いもの栽培が可能であり、当初目標としていた佐渡産「八幡いも」の栽培拡大には大きな期待がもてると手ごたえを感じました。

収穫した佐渡産「八幡いも」を使用して、昨年十一月、



で杏きい験に立った。
災銀吹の八幡の経
大幡の八幡の会に
越「八会」の出も煮役が
中

地元の人たちを招待して第五回芋煮会を実施しました。自分たちが栽培した八幡いもを使ったため、これまで以上においしく感じました。

■ 課題を克服し、さらなる活動の飛躍を

佐渡産「八幡いも」を栽培するにあたり苦労した点は二つありました。

一つは除草作業と収穫の掘り上げ作業が重労働であることです。この対策としては、栽培方法の変更が有効でしょう。栽培方法を畝上げ方式にし、黒のマルチビニールを使用することで雑草を予防、収穫も掘り上げから掘り取り作業に変わります。

二つ目は種芋の保管です。佐渡産「八幡いも」を保管するためには適度の温度と湿度が必要です。とくに湿度については過湿では種芋は腐食し、未湿では通常「風船」と呼ばれる皮だけ残り、中身のないものになってしまいます。冒頭にも記しましたが、八幡地区は砂丘のため「室」などはなく、砂山（約三メートル）の裾野に穴を掘り、埋めていました。この点については現在まだ検討中です。昨年は各農家に種芋の保管をお願いしたので、

さどがしま 佐渡島 data

新潟市の西約45kmの日本海にある国内最大の離島。面積854.88km²、周囲262.7km、人口67,502人（平成19年3月現在）。万葉の時代から「遠流」の地に定められ、北前船の寄港地としても発展、世界有数の産出量を誇る金銀鉱山が江戸末期まで幕府の財政を支えるなど、数奇な歴史背景から独自の文化を形成してきた。能楽や鬼太鼓、文弥人形など芸能も盛ん。産業は観光業、水産業のほか、離島でありながら県内でも有名な米どころであり、おけさ柿の産地でもある。平成16年3月に1市7町2村が合併、1島で佐渡市が誕生した。



本間東三夫 (ほんま とみお)

昭和39年佐渡市八幡で生まれる。「八幡・銀杏の会」会長として地域ボランティアのほか、地域防災などにも活躍。何でもまず、「やろう」という行動派。

最も保管率のよいところを選定していく予定です。一年目の佐渡産「八幡いも」再生プロジェクトとしては、満足のいく結果だったと思います。農家の人や八幡小学校の児童たちも、継続して栽培を手がけていきたいとのこと。さらに、新たに栽培したいという人も出てきています。そのような人々には、芽出しをした種芋を差し上げて栽培をもらうつもりです。また、地元の観光ホテルも我々の活動に協賛し、「地元八幡いも煮」という新しいメニューを作っていました。昨秋か

ら冬にかけて宿泊された観光客のみなさんにも、八幡いもを堪能していただいたというわけですね。やっと一年が過ぎたところです。佐渡産「八幡いも」復活は始まったところです。昔のように各家の畑に大きな葉っぱの八幡いもが栽培されるまでには、まだほど遠いですが、一歩ずつ復活に向けて頑張っていこうと思っております。最後に、今回の活動に協力していただいたみなさまに御礼と感謝を申し上げます。